

等性と不等性との区別であるような反省へ還帰する。そして自己の互に無関心的な二面が、またそのまま全くただ一つの否定的統一の契機にすぎないような差異性は、対立 *Gegensatz* である。

「相対的表現または相対的価値の大きさ」(相対的価値の同等性と不等性)は「価値の大きさ」(比較されたものまたは差異されたもの)に対して被測定有の面であるから、価値関係において一商品の相対的価値の不変が変動であってなお不変であり、また *vice versa* のとき、価値の大きさは相対的価値の大きさに対する規定態を失う(「明確にも余すところなしにも反映されはしない」)。すなわち「一商品の相対的価値」こそ、今まで「一商品の価値」と見られたところの単なる即自有的反省であって、商品価値の全く無規定的な区別なのである(「一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままでも、変動し得る」と「一商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままであり得る」)。かくして価値関係は即自有的な反省・否定を欠くところの自己関係であり、抽象的な自己同一性であって、従って正に被測定有そのものである(「一商品の価値の大きさとこの価値の大きさの相対的表現とが同時に変動しても、この変動が一致する必要は少しもない」)。この価値関係が対立に移行して等価形態が考察される。(続)

編集後記

今月号の論考は、これまで本研究所・月報 (No.475 = 2003.1) に掲載されたものの続稿で、次稿につながる大著の一部という位置づけであります。そうした意味においては、前掲載論文の目次を、本号の冒頭に再掲しておくなどの配慮を編集部として提案しておけばよかったのではないかと反省しきりです。

学生時代に倫理学の講義のなかで、ヘーゲルからマルクスへの展開を学んだ際の知的興奮を思い起こしながら、本号の編集作業をすすめて参りました。本稿の次なる展開が楽しみです。

(J)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 柴田弘捷

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
